

英謝野  
定先生  
不補

詩

翠  
波  
作

自  
留  
三  
十  
四  
年  
己  
丑  
三  
十  
七  
年

与謝野鉄幹添削

河野羽卒漱歌稿

英謝野實先生為補

詩

翠波作

自明三十四年  
己丑三十五年

北友

詞草 及見 河野 翠 澁

春は儂と暮らうと云ひませり 紅き子けふあつ

層釋 ころと掛けを 歌の舟座 狂甲 舟りのみ題解

それおちす 雲に去れあらん 哀の春昔 昔一の歌あかす

や ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。 ちぬ。

みづ色の 水邊夕づ 雨に 見 百斤を 放りて 三尺たか

あがすきは 此う檀の 枕京の べに 何に 芝門 子か 人は 十

八。 八。 八。 八。 八。 八。 八。 八。 八。 八。

ろとよりと 小ねの 寝息も ころびり 百斤を 置く 蝶たの

すや ころびり ねの 報も 人の まの 夜か せよ 白を 蝶 ありさ

きえ 刀を ちよひ 白く 紅き ちよひ ちよひ の みけ の 糸も 小雨に

見たり。 紅矢うけ したでに 紅い 人の 子の 唐と 水あみよ 鮮筆と



詠草

石見邑智郡田所村 河野岩雄

短歌

社友

河野翠漱(寛)

わが影のあさかりきよ夏の野に青葉を深くふ  
みわけし時。

末の世のあだれ恋をのぞきとみゆ白かりき  
よくの后や松

閑をのえ、しづとずかきよりそひて葉けとこそ  
まのあ子つ。

世をさけといづらがもとにらとつ子誰かためは  
にきうげんちや。

夏行とを腕このほそりにたえかねて 秋といふ知のい  
さ水ぬきん。

御居いざまうきみ子に閑とかで頬のぬねを少女に  
見ませ。

秀才わん理直の巻にのびり得る星の女神の可  
袂（びと）。


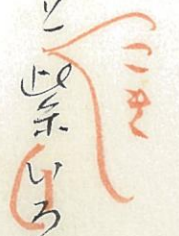
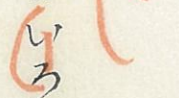
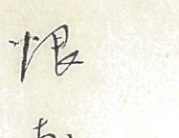

右は向左は向の今日のまどのむらさき雲のたひ艶か  
りや。

三三三三

もたえの子世も女ま果る今日のこに安慰得た  
りうくの閑

そのみ子に一照紅の名残ありうくの夢のよも  
語りか。

牛追み子牡のゆふべを野にすねて消えよぐたけ早  
水清らある。

あ。     



桐のそふよ野かまや桐のそふよ流を流氷を氷た  
い清き

並はとろーあめ世 鐘きついの梅梅遠き西地に差  
はとほざれ

物のとけしーそとわくげえる 理あの子あにあかん  
能にやつし。

<sup>そら</sup>天高きは秋のちらいとつたまふがす、まが下に蝶の  
並見了。

<sup>ゆふはえ</sup>夕照の西うつし、<sup>え</sup>桐の端 宇治のあゝ人紅梅  
がさね。

薄みたり またまを西一閑の道 たしとはし〜秋  
寒の片

紅のしゆるわが血にすゝそひそ人との言はぬ傘下の  
ぞう森。

藤<sup>かま</sup>もつ子山のそは道 笑さひー 松の木がくれうつく

ーよ空

あそろるる *あそろるる* 道にまよひそぬ 二人の旅のあす

あれとこそ

ゆきすりの 枝標にあんの葉ありや 見さうがた  
の 松原長き

人はあもたえの間を走り 行きこころえ やす  
を得ん誰

みちそりそ のき 行く果てを *いづこさた* はつら  
ついのあたりぞ

*かひたれ 遊*

以上三十首 九月十三日



さきづきのこのよこころよ ああきつよい城わ  
か魚いぎふふた

朝守のその衣裳はほど紅緒と人のしげ  
を短くもあらず

果子あれ恋のやわらに道すあれまのしおを  
亭こころ

暗きまは日そのおの思ひきた花地一里を蝶

に借るの黒い **入るのあし**

そぞあきさりのゆの **雨**のすくまに流るる花  
もくしとらんぬ **か**

東白里 幡麻路 越えて浪華にう草堂のしる  
に夕髪みたる

あはれを花にそよの涙ありあしむきあし  
あふ三斗とつゆ

十五き纏 神のそこのにむすけれこ叶あり  
ぬの少吹のそ

ありそあのもどを今し歌に好ぬ 清き  
月さや十八の秋

池路をいま、あれに好き得ぬまど  
ぬによく候 旅の入上

子郷のぬはる甲の西の、夕介さ

浪華江の歌

人らより 旅のあらどに 惚はれそ 笑はる  
さやきみ 恋の 一歌

宵月の花を 一更を 走せ 行き 追はん 影  
おし 笛の みたれよ。

浪華江の歌

以上 二十首 (十八首とある)

短歌

社友

河野翠漱

朝川はいづを流し 暮るる 夢のふたりよ

を

朝霧の島の子だんよ 折橋にすを 淋き 里の

のいと秋

三

そとぬきと人のつれあを 橋にわらぬ 玉花に 恨れを 今

はわれも 身

さちり 咄 さらを 今口のそいふ われ 甲斐 ちを せよ

らむの 地 あり

やの 路に やさし 昔も の 子だん 咲里 花 百を ち

はし ちが せよ

金糸に 大粒 まばゆき 霞の 一糸 酔ふ 子 丹 膳に

看らう 秋は ありき

朝霧に 馬み 似ひ とき せり 三宅 入か け 柳の 玉に

うすし 秋の 君 思ひ ありき

松本 女 雲の 夕を 暮ら ば ちが 吹笛 ちれ ち 暮ら ち

いと 秋

月が 岸 林の 子 ちが うす ちが 柳 傍し げと われ

に 経 説 け



わらまき一巻の文に一巻ありとは人

いた

甲

月

月

月

月

月

月

月

月

たそけんと書き人影 法ありき三斗前あり  
たそけのわかれ。

上日書  
家





和代のまゝの後流るるまゝかへりて  
短歌のつゆに河野翠澗石見物也

掩ひ得ぬここの子この胸われ自己がまきさしど果てれば山

の若き月わかばづき

かくさちて山のこゑも月  
とさしらるるやうなまの

下度には 旭みりしつれ 華月こいに重ねてけむも

強ひまつらあす

この二句は他より  
改めうせし

水青う若き山にくまの泥すそ恋にめしき山いさ

子あらぬ

さう下句の通ぢあまた再考

衣きぬ持たぬ小女よ人に昔もありで母と春こがね餌の畑に

葉摘む

糸りかりかきみすある甲の橋界の子こにも

涙に結ぬる

は花の下りまを嘆くやうさう

下りまをさしとさとも嘆くも昔昔浦茶いづれ妹に似たるその

花とさき

よはのさきとさき  
よはのさきとさき  
よはのさきとさき



誦す子にはあまりに惜しき詩ありやせえて

春行く涙に清きむ

春とはあつてもと

峠下りて二尺に足らぬ山道路まじに御すてふ

山道

小蛇も入たり

あつても白きつゆ

下すぢにそれとらふもうしよぬ本葉がくれ人

涙すきるる

とらふてあまのむかしのぶ以下再考牛久保のイシ流

水小蛇のちとつ

生石

和およむ袖のふたつこぞのまづかき去る八月のナニ  
はあれ一友

捨つ子には惜しき糸画のちとつあり秘めばや  
石にるる水のきふあげ

とき待具とくち草<sup>くさ</sup>地<sup>ぢ</sup>に夕焼<sup>ゆ</sup>や、明日おもほし  
様のありうらえ

話<sup>わ</sup>で来て大木のかけに白き入ぬ雲の鳥とか水  
神<sup>かみ</sup>

はくしつううの扱の神のみ論<sup>ろん</sup>亦や、努才われ  
猶詩をよみ得<sup>え</sup>ざる

ちとたびはおもも絶ちぬしおほあれど<sup>ま</sup>に言<sup>い</sup>ちの神  
によは<sup>あ</sup>き我あり

世<sup>よ</sup>臭<sup>くさ</sup>を脱<sup>だ</sup>せお  
妹<sup>い</sup>がこのみ真白きは弟<sup>あ</sup>泣<sup>な</sup>き  
顔<sup>か</sup>の花

いた手とは世の老人のとあしあし、われには  
うねり相入<sup>あ</sup>ての後

春もよ<sup>り</sup>夏は青葉の嵐などに二町ありが散る  
新奥溪の水

ニろる散文の如<sup>し</sup> 註(新奥溪は奇岩ヲ以テ名スルカノ勝地ナリ)

来<sup>り</sup>よ<sup>り</sup>友<sup>友</sup> 備<sup>後</sup>はなれ<sup>て</sup>二十里の水に<sup>遊</sup>ば<sup>す</sup>  
ん<sup>郷</sup>川<sup>の</sup>夏

註(郷りは山麓カ一の大河ニシテ備後ヲ流シ日本海ニ注グ、江川トモ書リ)

手<sup>に</sup>他<sup>人</sup>の<sup>手</sup>がいたづら<sup>に</sup>春<sup>の</sup>書<sup>を</sup> 鴉<sup>の</sup>舌<sup>に</sup> 記<sup>す</sup>  
石<sup>を</sup>こそ<sup>し</sup> ぶ<sup>ぶ</sup>

あつれ来<sup>て</sup>日傘に蝶のうらたけき<sup>を</sup> 暫し<sup>を</sup> 行<sup>く</sup>  
くま<sup>に</sup> 藤<sup>棚</sup>の<sup>下</sup>

以上、<sup>一</sup> 一<sup>冊</sup> 一<sup>冊</sup> 一<sup>冊</sup> 一<sup>冊</sup>

六月二十日 録



せもさけて芳つきかぐれ涼舟に二人相引

く水のもろの音

つ 待たらまきこすまます

さあらずは岡を衣引く蓮くふ常世

せめて待たよ

入纏げま女神系ふ子

いとあまを

村古寺の棠の近りの小いさよゆばにまつれ  
れぞいあくに様こしき

又ねはるは蓮の蓮かもる化びふもあでいざ白  
り香い出づ

手枕のふあの子やえらむがまづあきりき  
すくえらむる存

舟の雨に暫し言沈のうたゝ夜や枕の  
果乾とんせり亭

鐵

3

つはスミヤカ

以上他二佳句ク  
阿はあう

あやめとよはる人のたの言をわんにあは  
はむ歌あはぬ者

あつて小いさき人の身とよみぬえとせむ  
とや鳥えふ門

午もとて天にも地にもふたはしり  
船歌

曹州  
若葉くさる朝

きりあぬえにしは問ふな友とせし  
しあふて悲にもはらぶ

そとよるそ  
ゆの中らかを敷へたぬわさき  
もたえのあはふまれし

朝をむのよき世あも  
あはぬ  
甲斐ふる朝  
あ

何しあもた  
あはし  
今日  
の  
は  
文  
抱  
き  
つ  
か  
小  
鳩  
に  
は  
あ  
ぬ  
ま  
は  
か

可野翠湫

うつくしの歌はえつれを待てり得ぬ里の

小さ子が思も恋ふ秋（逢坂藍水の石に）の更人志をきり

のわたるうま

みまさけのあまをぬる身を何すれば此の

秋草に泣き落ちたる（あまの衣をこぼれ）の

その花の散りてや更に地に咲かす直に白く魂

つ帯せしいなぬ（あまの衣をこぼれ）の化粧心

若うして性質かたくまに世をゆびぬえち

し草もさいの花咲く（あまの衣をこぼれ）のあいや

白蓮にそえりやき斗の秋はくえの歌

見つる名が集のけ

歌に名をまつてきちはちまきさげれ物七

草に眉うつて

相みみ水にうしき月妻ごめ仰ぐ瞳

に秋や、実いき

この歌に切さるおれひさしうてよ（たまはた）セリその

よ歌に更けたる

さ、川にうらふ花のゆたきお、涙をさか

のぼるけふのあが身の

この衣に掩ひて（あまの衣をこぼれ）の秋の歌

のほろけふのあが身の

この衣に掩ひてま——  
とそく化ちやまする  
や  
しらはぎ  
女自萩の秋露たに

裏を推して  
秋の秋草に家ぬけて月  
をよすおにこの川の舟

たまひつる<sup>ふはこ</sup>文書に添えて  
歌<sup>の</sup>流るはぐあき  
女郎花返しのあ

夜や更けて涼しいとよぐ  
藤紫のみ裳やちやぐ  
葉柳に

竹の根に<sup>琴や</sup>見し  
ゆり月さしのげも  
み薬もれり留木

相見とはまだも泣かき  
このき平人

痛み<sup>か</sup>け<sup>た</sup>目<sup>は</sup>か<sup>せ</sup>さ<sup>した</sup>ま

や<sup>あ</sup>な<sup>の</sup>神<sup>ん</sup>  
鏡

歌信

河野翠漱

世の秋のさじきぬにいととたれはあどろみ  
ぬるけふのゆが身が

いとせめてみゆたひもせ秋子けしよ  
くらしもたえあしみの

上は咲くそのひと花つやうしさにきしも  
ゆつる三魂下り路

美き君のちよみげ見ゆるみまのあとあやし  
うこには胸のけがし

あしひ出まほそんよみまのしをまめおれの  
おれがまなしうた

あしぬ恋にあたり情の斗絶れぬれと涙に  
身もやつしぬる

いねあられはさなき君さくしのぼし  
花もおかるし君

死ぬよとみことあふたまをよと見る今か  
のあまのさびしき

三直秀

破人筆のさためにたつる涙あはせを  
つし情あふ

秋を師の流るはいに、すふふ神のみ  
に天とませ

うたにゆか見つる  
うたにゆか見つる  
うたにゆか見つる  
うたにゆか見つる

あとなににみはに  
またいませよとぞ  
人をもよそにゆか  
又もたためこのあ

世悪をば知ぬ  
み昔得ぬさふとば  
よまはらし





見ませ空にうししうのやあひやんよ今に  
このあまうたえたる

人として行くに今つにこの涙<sup>うなげし</sup>を万世のよ  
かゝるうんや

ナニヤナニヤ

の星よるる

新巻の歌

河野五平

見つるゆかしの鈴の塵をかまはせ  
雲よまの藤の葉の歌

作の見る初日の雲のまはし  
うらあか神に

うけまゝそのまゝ  
宛の海に詩の花と咲く

あはれ 二十のまのまはし

と海にこそあはれ居る

さうかきしもさよふ

さうかきしもさよふ

詩にまはし 十のまはし

一巻の初日

侍、立舟の船に見るといつれある若水  
さげを 松まつの丸

若水 遊にはた詩に丸とや子れを 踏た

あつものかこの小言こごゆれ

相あひを 念ねんせ 珠たまに 二に合あひ かし 思

いふまゝの 珠たまこゝた

春はるも 子こと 希まれなる かけに まらぬと だ  
の 一ひとと せ あり けり さま

六む斗とまき けり 舟ふねの 壁かべに 泣なく 人ひとの 羽は子こ  
の 涙なみだが いたし あり ぬ

書かき 人ひとを 丸まるに ち あり 春はるの 歌うた 強つよ  
ある 神かみと 二ふた十じゅう 四よひ した

三月十日 夜 錢



や上らざるはあれと又：ちの城きりてハ  
けりては

神信

この強きこころし、このまじき氣は天他の強き  
雨雲の戸のゆかこのいふ月環をまじして  
白本せりて天にいふや  
可の神翠激

人のいざ斯くと斯かれといふはもつさ  
きかたよ胸に向はむ

細道にふたつ牛追ふ書を得て古  
うたふ世に今帰らぬ

いれけと散りて砕けとさへハ地に嘆  
ける女神の恋か世の福喜印  
この長はるなる

枕かへとも魔よぐんとも天地の  
エントシの巻に詩は疎らむ

しれあぬの胸あふ花を地に吐き  
神のみ膝に白きや得せむ

ふさぎづくわれにハふのまじり  
あつたのいふりのふ潮みだす

神のありまじのい波字は正失月人  
こやがて得んせに書待し

の心を悼む

ふさぎゆくわれにハミのあはれおこ  
あしのふりよのちしほ潮みだす

あはれおこ  
あしのふりよ

軒のあましの波字は正夫良ひ  
こやがて得んせに書待し

あま

そいらにもまよらぬ梅朝戸  
雨の香さむうゑに泣かす

あま

庭の空あやが詩の筆にこかれ  
と書に

かきとくくくくくくくくくくく  
かきとくくくくくくくくくくく

あふけよとまこえもすくく梅の梅  
の情に師とえつる君

仁梅の政の夕つも教けてよ  
みける春の夕六

あま 香にぞ枕やけり  
あま 香にぞ枕やけり

あま 美しく早えぬるあま黄い糸の雲の朝  
うにあまもしく梅

あま 詩に集む西二百里のこのましまわん  
に知らぬそめが幸定めぬ  
伊集良正の君  
あま 伊集良正の君  
あま 伊集良正の君

池にそひて仁梅し梅存月次娘か袖に  
あま 最ふやそのあま

正しぬびたびるも言神に例ましまはた  
ましま詩にまじはる

男子まことまにまてやまはるまやあ  
さや玉ふふ神のま昔ぞ

そい仰きした刀の目取といふまは沙  
漢の世も人は居まふ

この糸に解れこや鳴るま音に出でい  
まは歌にも君を訪ふく

人丸は籠のまじりとまは君よ大宮人の昔も  
にかつれ

右見踏はまの旅は強ひ師ま人丸の歌う  
まにまはま

新海のとこ新らしく流るか  
はせまのまに人つゝあま  
一すじの道をたどるもか園生の百を  
らりやまも仰くあ

おさじはさきし園生のけりあふと神  
も見まきめはしき知に所る(内田村の先に)

二月十日  
丹波